

# 『山芋』 顕彰碑建立の問題についての一考察

太郎良 信\*

## A Consideration on the Erection of the Book of Verse “YAMAIMO” Honoring Monument

Shin TAROURA

**要旨** 寒川道夫編・大関松三郎詩集『山芋』（百合出版，1951年）は戦前の小学生・大関松三郎の児童詩ではなく，編者の寒川道夫が戦後に書き下ろした少年詩であるとする見解を，筆者は著書『『山芋』の真実—寒川道夫の教育実践を再検討する』（教育史料出版会，1996年）において示している．その著書の出版まもなくの1997年に，筆者の見解を否定し寒川道夫を擁護することを目的とした『『山芋の真実』検討会』なるものが生まれた．その「検討会」は研究集会を重ねたものの，反証は示さぬままに1年間で研究集会を中断した．ところが，その「検討会」（改称後は，寒川道夫研究会）が2004年に『山芋』顕彰碑を建立した．その碑文は1985年に中野光が書いた寒川の評伝に酷似したものであり，しかも，その中野の評伝は今日の寒川道夫研究や『山芋』研究の水準からみれば検証に耐えないものである．しかし，建立された『山芋』顕彰碑は，寒川道夫や大関松三郎への関心を改めて喚起し始めている．今後，『山芋』顕彰碑が，寒川が犯した歴史の偽造を拡大再生産する役割を果たすことが危惧される．

キーワード：寒川道夫 中野光 『山芋』 生活綴方 児童詩

### はじめに

「寒川道夫と松三郎」の石碑（以下においては『『山芋』顕彰碑』と略称する）が，2004年9月23日，新潟県長岡市に「〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立実行委員会」により建立された【写真1】．その建立に際して，「記念の集い実行委員会」（代表・佐藤守正）が主催者となり，長岡市教育委員会と黒条小学校区連合町内会，長岡市立黒条小学校PTAの三者の後援を得て「〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立記念の集い」が開催されている<sup>1)</sup>．

本論文は，その『山芋』顕彰碑の建立の問題についての考察をおこなうものである．

### 1. 『山芋』 顕彰碑建立の趣旨

\*たろうら しん 文教大学教育学部心理教育課程

『山芋』顕彰碑の建立の趣旨は，『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立記念の集い』に掲載された次のような「ごあいさつ」に示されている．

「〔前略〕寒川道夫先生とその教え子である大関松三郎の詩集『山芋』は，戦後，「再び



写真1 『山芋』顕彰碑  
2005年8月に筆者が撮影したもの。

教え子を戦場に送り出すような教育はすまい」と誓った全国の教師達にとって、その導きの星でありました。〔中略〕

また1960年代から70年代にかけて小学校高学年の国語の教科書に松三郎の詩集『山芋』の中の作品が数多く掲載され、それを学んだ子どもたちにも松三郎に対する憧憬の気持ちが横溢したものでした。

寒川先生と直接交流があった教師達、そして松三郎と一緒に学んだ方々が健在のうちに、お二人を顕彰するものを形にして残したいとする私たちの願いがここに結実し、松三郎の生家の、それも松三郎の墓石に並べて記念碑を建立できたことを大きな喜びとするものです。

2004年9月23日

〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立実行委員会<sup>2)</sup>

この「ごあいさつ」によれば、『山芋』顕彰碑建立の趣旨は、寒川道夫(1909～1977)が1938(昭和13)年度の尋常科6年生・大関松三郎の詩集として編集した『山芋』(百合出版、1951年)を根拠にして、寒川道夫と大関松三郎(1926～1944)とを顕彰するということにある。

『山芋』は、1950年代以降、長期にわたって「ごあいさつ」に書かれているような評価が与えられてきた。しかし、それと並行して、『山芋』出版に先立つ時期から『山芋』の詩は戦前の児童詩とは考えられないという指摘が出され、断続的に議論が続いていた。

1990年代以降においては、佐藤国雄『「山びこ」「山芋」一人間教育の昭和史』(朝日新聞社、1991年)や木下浩『「山芋」考—その虚構と真実』(創童舎、1993年)等によって、『山芋』を大関松三郎の作品であることに對して疑念が存在するということが広く知られることとなった。それらの一連の議論を踏まえつつ、筆者は『「山芋」の真実—寒川道夫の教育実践を再検討する』(教育史料出版会、1996年)において、『山芋』は大関松三郎の作品ではなく、戦後に寒川道夫が書き

下ろした少年詩であるとする見解を示している。

こうした『山芋』に関する近年の研究動向は、生活綴方史研究の進展を示すものとして肯定的に評価されてきている<sup>3)</sup>。

新潟県の地元新聞社の出版物においても、近年において「寒川道夫」や「大関松三郎」を取り上げる際には「大関松三郎詩集『山芋』は寒川の作ではないかという異論が出ている<sup>4)</sup>」ことを明記したり、寒川が1948(昭和23)年から勤務した明星学園において「同僚の中から『「山芋」は大関の作品ではない。寒川が戦後に自分で書いた』と批判する声が上がった<sup>5)</sup>」ことに言及したりしている。これも『山芋』研究の動向を反映したものである。

このように見てくると、『山芋』顕彰碑の建立は、近年の『山芋』研究の動向のなかでは特異な位置を占めるものである。

## 2. 『山芋』顕彰碑建立の経緯

### (1) 『「山芋の真実」検討会』の発足

『山芋』顕彰碑の裏面の碑文の署名は「にいがた寒川道夫研究会」である。『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立記念の集い』に掲載された「経過報告」では「にいがた寒川道夫研究会」には言及がないものの「寒川道夫研究会」には言及があり、「にいがた寒川道夫研究会」と「寒川道夫研究会」とは同一のものとみられる。その「寒川道夫研究会」は「経過報告」の冒頭の項目において次のような形で言及されている。

「太郎良信著「山芋の『真実』」出版(96年)を契機に、改めて寒川道夫の業績をたどろうとする動きとして、97年1月、新潟県内の教員・元教員を中心に『「山芋の真実」検討会』(後に寒川道夫研究会と改称)が発足。栃尾市一の貝小学校の教え子や同僚教師だった方々、長岡市黒条小学校の教え子(松三郎の同級生)や同僚の先生方を訪ね、お話しを伺ったり資料を収集したりの活動が始まる

6)

この「経過報告」により、『山芋』顕彰碑建立の発端は、筆者の『「山芋」の真実』の出版を契機に組織された『「山芋の真実」検討会』にあり、同会を改称したものが「寒川道夫研究会」ということとなる。

そこで、その『「山芋の真実」検討会』（以下「検討会」と略称する）が何を目的としてきたのかを見ていかなければならない。

「検討会」の発足にあたっての呼びかけ文は次のものである。

「太郎良信著『山芋の真実』検討会のご案内  
(一九九六・一二・一〇)

新潟県作文の会・佐藤守正

あなたは、太郎良信氏（日本作文の会常任委員、文教大学教育学部助教授）が、このたび『山芋の真実』（教育史料出版会・二三〇〇）という著書を公にされたことを、ご存じでしたか？

その中で太郎良氏は、大関松三郎の『山芋』の詩集は実は松三郎の作ではなく、『山芋』の編者・指導者の寒川道夫氏の創作だったと断じています。そして、寒川氏の全教育実践への批判もそこで展開しています。〔中略〕

私たち新潟県の教師たちは、太郎良氏の見解が常識になることを放置できないとかがえま。〔中略〕

言うまでもなく私たちは、太郎良氏への感情的な反発を持っているわけではありません。寒川実践の地元である新潟県が、太郎良提起への解答をする権利も義務も持っていると思<sup>(ママ)</sup>ったが故の行動です。あくまでも、実証的に太郎良氏の著書の検討を行いたいと考えます。

あなたのお力添えとご参加を頂きたく、第一回の集会のご案内をする次第です。

一九九七年一月五日 午後一時～四時

会場 新潟市・新潟会館<sup>7)</sup>

この呼びかけ文で明らかとなるように、「検討会」は、「太郎良氏の見解が常識になることを

放置できない」という課題意識のもとに発足したということとなる。

「検討会」の第1回集会のあと、佐藤は、「検討会」が発足したことを紹介する文章を二つ書いている。

新潟県内向けのものでは、「私たちは、太郎良氏<sup>8)</sup>がその著書で展開している論証をただ感情的に否定するだけでよしとするものではない。氏の論証の根拠となった事実を、私たちの立場からも洗いなおしてみようと思っているのである」として、筆者の見解を感情的に否定することにとどめず、史実の検証をおこなうものであるという説明をしている。

また、全国向けのものでは、「私たちは、太郎良氏の緻密な論証をただ感情的に否定するつもりはありません。しかし氏の論証の論拠となった事実を、私たちの立場からも洗いなおしてみようと思っています<sup>9)</sup>」として、筆者の見解を感情的に否定するものではなく、史実の検証をおこなうものであるという説明をしている。

筆者の見解を「感情的に否定」する心情の有無について新潟県内向けのものと全国向けのものとで書き分けているが、筆者の見解に同意できないという心情については、全国向けのものにおいても次のように述べている。

「私たちは、『「山芋」や寒川の戦前の教育実践は生活綴方教育とは異質なもの』とし、寒川の戦前の業績の全てに疑問を投げかけ、それを否定するかのような論調には同意することはできないのです<sup>10)</sup>」

「検討会」は、『「山芋」の真実』の否定と寒川道夫擁護を目的として発足したものである。

## (2) 「検討会」の集会の内容

「検討会」第2回集会は、1997年3月28日に開かれている。記録文書『「山芋の真実」検討会活動記録 その2』には次のように記されている。

「1997.3. 28 第2回集会 at.新潟会館

(参加者11名) 参加者〔氏名は略〕

●報告されたこと

〔中略〕

- ・木村，加藤から，一の貝・黒条訪問調査
- ・木村から，常木氏（現渡辺，一の貝での寒川の同僚）との面接聴き取り調査

●話しあわれたこと いくつか

〔中略〕

- ・太郎良氏の論証一つ一つについて反論を試みるということにエネルギーを使うより，寒川があの時代状況のなかで，教師としてまた市民としてどのような実践をしてきたのかを確かめることで，私たちが受け継ぐべきもの何かを明らかにすることに力を注ぎたい。

〔中略〕

- ・とは言え「山芋」の元になった作品は存在せず，全くの寒川の創作だったとする太郎良氏の主張は覆したい。松三郎の学年の文集発掘に全力を挙げよう。

〔中略〕

●次回までの仕事の分担

- ・太郎良氏の推論の方法論上の弱点，誤りを指摘する。（池田）
- ・太郎良氏の著書の中で，断定している部分と推定している部分を整理して，推定部分については反論の方途を考える。（木村）
- ・一の貝，黒条の教え子との面接，聴き取りを行う。（加藤，佐藤）
- ・和光大学に保存されていると思われる寒川氏の資料の有無を確認する。（木村）
- ・長岡市が保有する歴史資料から，寒川関係の資料を検索する。（向後）
- ・原豊一郎氏と面接して，聴き取りをする。（加藤）
- ・「人間教師として生きる」など，寒川自身が自らの実践を語った著書を調べ，太郎良氏の著書との齟齬，矛盾点を整理する。（小堺）

●次回集会 6月8日（日）午後1時～4時 於新潟会館<sup>11)</sup>

この記録によれば，第2回集会では，寒川道夫

関連の資料調査や関係者の聞き取りをおこなうことや筆者の著書の検討を分担したこととなっている。

その後，第3回集会（1997年6月），第4回集会（1997年12月）まで開かれて，集会は中断したという<sup>12)</sup>。

結局のところ，「検討会」の発足にあたっての呼びかけ文において「太郎良提起への解答をする権利も義務も持っている」と自認し，新潟県内外にその発足をアピールしていた「検討会」であるが，実際には何らの反証も示さぬまま今日に至っている<sup>13)</sup>。

そして，その後の経過からみれば，「解答」の方法として，寒川道夫の顕彰碑建立を選んだということとなる。

### (3) 寒川道夫顕彰碑の建立計画

「経過報告」には，『山芋』顕彰碑とは別の顕彰碑を建立する計画があったことが記されている。

「00年7月6日，加藤〔加藤栄二〕・早川〔早川清〕・佐藤〔佐藤守正〕の3人で黒条の願敬寺を訪問。境内の一角に「林直助博士，寒川道夫先生を顕彰する記念碑」を建立させていただきたいと要請する。一旦は住職の承諾を得たものの，願敬寺の都合でとん挫<sup>14)</sup>」

林直助（1870～1953）は，京都帝国大学助手を経て愛知県立医学専門学校教諭，さらに愛知県立名古屋医科大学教授を務めた医師である。京都帝国大学助手を務めていた1906（明治39）年に「新潟県より恙虫病調査員を囑託され，この時から恙虫病の研究に填まった<sup>15)</sup>」といわれ，黒条小学校区の願敬寺に研究室を設けて，半世紀近くの間，恙虫病の研究と患者の治療にあたった。林の恙虫病研究には，地元住民の理解と支持があったことが明らかにされている。

「恙虫病研究に対し久原家（名前不明）から金一万円（今日の金額で約八〇〇万円位）を10年賦で寄付され（大正八年），恙虫病有毒地2町歩を研究用として授与されるなど地区

民の多大なる援助を受け、昭和8年教授退官後も研究を継続し、昭和28年5月長逝する<sup>16)</sup>]

こうした林の恙虫病研究を映画化したものに荻原耐演出の映画『恙虫記』（東宝文化映画、1941年）がある。林と寒川の接点は、1940（昭和15）年の第2回教育科学研究協議会における報告において寒川が校区内の恙虫病に言及したことが映画制作の契機となったこと、そして、寒川が『恙虫記』の制作に協力し、数箇所出演していることにある<sup>17)</sup>。「検討会」はそのような接点を理由として、林の研究室が置かれていた願敬寺の境内に林と寒川の顕彰碑の建立を企てたものとみられるが「願敬寺の都合でとん挫」したという。要するに、碑の建立地の提供を得られなかったということである。

その頓挫の後、4年間を経て、『山芋』顕彰碑の建立へ向かうこととなる。

「04年4月11日、木村〔木村隆利〕・加藤〔加藤栄二〕・佐藤〔佐藤守正〕で松三郎の実弟・大関秋一氏宅を訪問、松三郎の墓碑の隣に寒川先生と松三郎を顕彰する碑を建てたいと要請して承諾を得る<sup>18)</sup>」

ここで、大関松三郎の生家の敷地に『山芋』顕彰碑を建立する見通しが立ったこととなる。

こうした経緯をみると、当初の「林直助+寒川道夫」の顕彰碑建立計画から「寒川道夫+大関松三郎」顕彰碑建立計画へと方針転換がなされたことが明らかとなる。「林直助+寒川道夫」の顕彰碑が頓挫して「寒川道夫+大関松三郎」の顕彰碑に改めるという経緯からみれば、「検討会」が目指してきたことは寒川道夫の顕彰碑を建立することにあり、その建立地を確保するために当初は林直助の名前が、その後には大関松三郎の名前が利用されたものとみるほかはない。

### 3. 『山芋』顕彰碑の碑文

#### (1) 碑文と中野光の評伝との酷似

『山芋』顕彰碑の正面には、次の文言が刻まれている。

「前へなら進む どれほど荷物が重かろうと  
松三郎」

この文言については、「松三郎の詩『馬』の一節。寒川先生ご自身の墨蹟によるこの文言が刻まれた板を寒川龍彦氏が所有されており、それをお借りして刻んだもの<sup>19)</sup>」という説明がなされている。

また、碑の裏面には「寒川道夫（一九〇九～一九七七）と松三郎」と題する一文が刻まれている。この一文については「木村隆利が起草した文を、石碑の大きさの関係から圧縮したもの<sup>20)</sup>」という説明がなされている。

しかしながら、『山芋』顕彰碑の碑文は「〈列伝〉教室に生きた教育者たち」という雑誌連載企画の一環として1985（昭和60）年に発表された中野光の評伝「人間教師 寒川道夫<sup>21)</sup>」の叙述を想起させるものである。

そこで、中野の評伝の一部、碑文原案、および碑文を並べてみると、次ページに示したような比較対照表となる。

中野の評伝と碑文原案と碑文の三者を通して同一の文言と見なせるところに下線を付した。また、評伝と原案との間においてのみ同一の文言と見なせるところに二重の下線を付した。その際、「彼は」「先生は」「寒川は」という表記の違いについては、意味するものはいずれも寒川のことであるため、同一と見なした。また、元号表記か西暦表記か、漢数字か算用数字か、漢字か平仮名かの違いもあるが、これも意味するものは同じであるため、同一と見なした。碑文では、短歌のなかの『』が外されているほか、「戦」が「戦い」へ、「生命」が「命」へと改められているが、これらも同一と見なしている。その他、碑文原案にはワープロ入力の際のミスと見られるものがあるが、それらは無視することとした。

このようにして比べてみると、まず、碑文原案の前半は碑文にはほとんど生かされず、ほぼ全面

中野の評伝と碑文原案と碑文の比較対照表

中野光「人間教師 寒川道夫」より <sup>22)</sup>	碑文原案（裏面） <sup>23)</sup>	碑文（正面、裏面） <sup>24)</sup>
<p>いま、寒川家の玄関に入ると、「<u>どれほど荷物が重かろうと</u>」という彼の書いた文字が一枚の木片に彫りこまれている。それは『山芋』の中の「馬」と題する詩からとられた言葉である。 〔中略〕</p> <p>彼はまた「<u>いさぎよく人を殺せと教うるを『教育』とせじ口くさるとも</u>」と詠んだ。</p> <p>そしてこの思想のゆえに太平洋戦争のはじまる直前の昭和十六年十一月二十五日の早暁に治安維持法違反という名目で検挙され、教壇から追われた。</p> <p>師とわかれた松三郎はその後、戦の庭におもむき、南海に短い生命をしずめてしまった。</p>	<p>寒川先生は1909（明治42）年新津市に誕生。長岡中学時代に文学に興味を覚えて同人雑誌を出版し、新聞に意見発表することが多かった。その後高田師範学校二部、専攻科を終え5ヶ月の軍隊勤務を経て、1930年小学校の教師となった。この頃満州事件・県学<sup>(ママ)</sup>の収賄事件が起こる。それを批判した子どもの文集が問題化し、1932（昭和7）年9月から黒条小学校に転勤させられる。この頃から子どもたちの作文を通して、全国的な生活教育の推進に参加した。</p> <p>先生は「<u>いさぎよく人を殺せと教うるを『教育』とせじ口くさるとも</u>」<sup>(ママ)</sup>を詠んだ。</p> <p>この思想の故に、太平洋戦争の始まる直前の1941年11月25日早暁「治安維持法違反」の疑いで検挙され、新潟警察署に連行、留置・拷問を受ける。</p> <p>「前へなら進む <u>どれほど荷物が重かろうと</u>」<sup>(ママ)</sup>（松三郎の詩の一節）</p> <p>師と分かれた松三郎は、戦の庭に赴き南海に短い生命を沈めてしまった。</p>	<p>【正面】 前へなら進む <u>どれほど荷物が重かろうと</u> 松三郎</p> <p>【裏面】 寒川道夫（一九〇九～一九七七）と松三郎</p> <p>寒川道夫は一九三二年から黒条小学校の教師として、全国的な生活綴方運動に参加。松三郎はその時の教え子の一人であった。</p> <p>寒川は「<u>いさぎよく人を殺せと教うるを教育とせじ口くさるとも</u>」と詠んだ。</p> <p>この思想の故に、太平洋戦争直前の四一年、治安維持法違反の疑いで新潟警察署に検挙され拷問を受ける。</p> <p>碑文は寒川の筆跡による松三郎の詩「馬」の一節。 師と別れた松三郎は戦いの庭に赴き南海にその命を沈めてしまった。</p> <p>二〇〇四年九月建立 にいがた寒川道夫研究会</p>

的に削除されていることがわかる。

寒川の小学校教員生活は、代用教員としては1926（大正15）年5月から1927（昭和2）年3月までの新潟県古志郡北谷村田井尋常小学校代用教員、訓導としては1928（昭和3）年4月から1929（昭和4）年3月までの古志郡入東村来伝尋常小学校訓導から始まっている。いずれにしても、1930（昭和5）年に寒川がはじめて小学校教員になったかのような碑文原案の記述は誤りである<sup>25)</sup>。

また、1932（昭和7）年9月の寒川の黒条小学校への転任は、新潟県の教育界における「教育疑獄の清算」としておこなわれた大規模の人事異動の一環である。その人事異動の際に地元紙は号外を発行して「県教育界の刷新で小学教員大異動転勤訓導全部で八十二名 人材抜擢も加味す」として報じている<sup>26)</sup>。ちなみに、寒川も1932年秋に郷土社（小砂丘忠義主宰『綴方生活』の発行所）に宛てた葉書において「教育疑獄の余波で九月に

転任させられて悲憤やる方ない」と書いていたことが判明している<sup>27)</sup>。

碑文原案にある教員生活の始まりの時期や異動の理由については寒川が戦後に回想記で述べてきたことであり<sup>28)</sup>、その回想記を無批判に取り入れて碑文原案が起草されたものとみるほかはない。内容上からみて削除されるべき文言である。

碑文原案の後半は、中野の評伝と酷似したものである。そして碑文原案の後半は、ほぼそのまま碑文に生かされている。そのため、裏面の碑文の大半は、中野の評伝と酷似したものとなっている。

このことは、「検討会」が4回に及ぶ集会を開催したにもかかわらず独自の見解を持ち得なかったことを示しているとともに、中野の評伝の内容をそのまま是認していることを示すものである。

また裏面の碑文の大半が20年近くも前の1985年に公表された中野の評伝と酷似しており、中野の評伝は掲載誌の読者にとどまらず寒川を慕う人々の間でも知られたもの<sup>29)</sup>であるにもかかわらず、中野の評伝に依拠して碑文を作成したことには一切触れぬままに「木村隆利が起草した文を、石碑の大きさの関係から圧縮したもの」として説明することは、第三者から見れば、碑文は中野の評伝を盗用したものと指摘せざるを得ない<sup>30)</sup>。

## (2) 中野光の「人間教師 寒川道夫」の検討

すでに明らかなように、『山芋』顕彰碑の裏面の碑文は、中野の評伝に酷似したものである。また、碑の正面の碑文の「前へなら進む どれほど荷物が重かろうと」という文言について、「松三郎の詩『馬』の一節」と説明されているが、中野も、事実上は、同様のとらえ方をしていたのである。

そこで、中野の評伝のうち、『山芋』顕彰碑の碑文に関連した部分について検討していくこととする。

### (ア)「前へなら進む どれほど荷物が重かろうと」

中野は、「どれほど荷物が重かろうと」という文言の木彫に関わって次のように書いている。

「いま、寒川家の玄関に入ると、「どれほど荷物が重かろうと」という彼の書いた文字が一枚の木片に彫りこまれている。それは『山芋』の中の「馬」と題する詩からとられた言葉である

どんなになぐられても  
 どんなに叱られたって  
 一足でもさがるもんか  
 そうだ、そうだ、さがりはしないぞ  
 むりじゃないか、むりなことだ  
 前へなら  
どれほど荷物が重かろうと  
 進んでやる——

松三郎が馬丁にひっぱたかれている馬をみてこういった心境に寒川もまた心から共鳴したのだった<sup>31)</sup>」

このように、中野は、「馬」(『山芋』)の一部であるかのような文言を「引用」するかたちで示して、そこに「どれほど荷物が重かろうと」という文言が含まれていることを示している。しかしながら、中野が「引用」したものと内容的に対応しそうな部分を「馬」(『山芋』)に求めると、次のものとなる。

「前へなら進んでやる  
 いくら重い荷物をひいてでも進んでやる  
 だが後へなんか  
 どんなになぐられたって  
 どんなに叱られたって  
 一足でもさがるもんか  
 そうだ そうだ さがりはしないぞ  
 むりじゃないか むりなことだ<sup>32)</sup>」

すでに明らかなように、「馬」(『山芋』)は中野が「引用」したものととは大幅に異なるものであり、中野が「引用」の形で紹介したものは改竄されたものである。中野は「どれほど荷物が重かろうと」という文言を含む「馬」なるものを示して、木彫にあるという「どれほど荷物が重かろうと」という文言が「馬」(『山芋』)の一節であるかのような御墨付を与えているのである。しかし、「どれ

ほど荷物が重かろうと」という文言は「馬」（『山芋』）の一節ではない。

ところで、『山芋』顕彰碑正面の碑文に採用された文言は「前へなら進む どれほど荷物が重かろうと」であり、中野が寒川家の玄関で目にしたという木彫の文言とは異なるものであるかのようにみえる。しかし、実際には中野が目にしたというものも「前へなら進む どれほど荷物が重かろうと」であったとみられる。

中野が和光大学教授を務めていた時期に和光大学生生活綴方教育研究会（和光大学中野研究室気付）が発行した『どれほど荷物が重かろうと—寒川道夫先生追悼文集』（1978年）がある。その題字に用いられた「どれほど荷物が重かろうと」の墨跡【写真2】については、表紙裏に「大関松三郎『馬』より 書・寒川道夫先生」という解説があり、その文言が「馬」から取られたものであることと寒川の墨跡であることが明らかにされている。

そして、その「どれほど荷物が重かろうと」という墨跡は、『私のなかの寒川道夫 つつが虫忌会報13回忌特集号』（1989年）の巻末に掲載された「前へなら進む どれほど荷物が重かろうと」という木彫の写真【写真3】や、『山芋』顕彰碑の正面に彫られた「前へなら進む どれほど荷物

が重かろうと」の墨跡【写真4】の当該部分と同一のものである。つまり、和光大学生生活綴方教育研究会の追悼文集の題字に用いられた墨蹟は、寒川家所蔵の木彫の墨跡の一部ということとなる。

改めて整理すれば、1978年に和光大学生生活綴方教育研究会が木彫の墨蹟の一部の「どれほど荷物が重かろうと」を「大関松三郎『馬』より」として文集の題字に用いて、さらに1985年に中野が「どれほど荷物が重かろうと」の墨跡を含む木彫を『『山芋』の中の「馬」と題する詩からとられた言葉』が彫られたものとして紹介したのである。和光大学生生活綴方研究会は木彫の墨跡の一部を追悼文集の題字として用い、中野は評伝で木彫の文言の一部を紹介したということとなる。

こうしてみると、中野の周辺ないしは中野が、木彫の文言を「馬」（『山芋』）の一節としてとらえてきたことになる。寒川が木彫を作成したとき、寒川においては「馬」（『山芋』）を念頭においていたであろうことは容易に察せられることである。しかし、第三者がそれを「馬」（『山芋』）の一節としてとらえることは誤りである。

（イ）「いさぎよく人を殺せと教うるを『教育』とせじ口くさるとも」

中野は、寒川が治安維持法違反の嫌疑をうけて

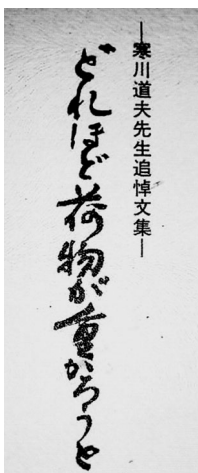


写真2 和光大学生生活綴方教育研究会『どれほど荷物が重かろうと』の表紙の題字部分



写真3 寒川による木彫の写真『私のなかの寒川道夫 つつが虫忌会報13回忌特集号』の巻末ページによる。

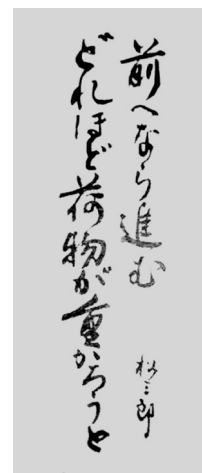


写真4 『山芋』顕彰碑の正面の碑文『寒川道夫と松三郎』石碑建立の集い』の表紙による。



検挙された理由について次のように述べている。

「彼はまた「いさぎよく人を殺せと教うるを『教育』とせじ口くさるとも」と詠んだ。そしてこの思想のゆえに太平洋戦争のはじまる直前の昭和十六年十一月二十五日の早暁に治安維持法違反という名目で検挙され、教壇から追われた<sup>33)</sup>」

中野は、「いさぎよく人を殺せと教うるを『教育』とせじ口くさるとも」という寒川の反戦的な短歌を引用しつつ、「この思想のゆえに」寒川が治安維持法違反で検挙されたこととらえている。寒川が検挙される前の時点で詠まれた短歌であるならば「この思想のゆえに」という説明が成り立つかもしれない。しかし、中野の評伝では、短歌の出典が示されておらず、詠まれた時期も不明のままであり、その短歌が戦前の寒川の思想を反映したものとする論拠にはならない。

この短歌は、1976年の寒川の回想記「治安維持法断罪」に登場している。そこで、その短歌がおかれている文脈を確認していくこととする。

寒川は、検挙されて取調べを受けた際のことを回想するなかで、次のように書いている。

「兵隊さん ホイ  
死んでしまえ！ ハイ  
兵隊さんは 大将のいうとおり  
なんでもいつでも ハイハイハイ  
兵隊さんになると  
人間は でくのぼうだ  
兵隊さん ホイ  
人をころせ ハイ  
そんな兵隊さんは  
わらたばになってしまえ

浅井一雄は『イワンの馬鹿』を読んだ感想文の中に、こういう一節をもった詩を書いた。でくのぼうになる兵隊さん否定である。「広瀬中佐」「乃木大将の幼年時代」「水平の母」「一太郎やあい」「児島高德」などのずらりと並ぶ『小学国語読本』を勉強していてもだ。世をあげて戦争熱が鼓吹され、勝って来るぞ

と勇ましく／誓って国を出たからにゃ／手柄たてずに死なりょうか。」と日の丸を振って歌っている日々、伊丹松男は「早く平和に」という題で「そんなかわいげらな戦争は早くやめて、早く平和になってくれるのが一番待ちどおしいのです。」と戦争美談の持ち主として新聞記者が父の留守宅におしかけてちやほやするのをおしのける綴り方を書き、西岡義伸は、戦争がひどくなればなるほど馬鹿くさい「迷信がふえる」と書き、永井克己は「兵隊さんは今夜はねむれない」という詩で「戦争なんか早くやめて（村へ）帰りたいなあとばかり思っているだろう」と、戦地の兵士らの故郷の念に心はせて書いている。

いさぎよく人を殺せと教うるを  
『教育』とせじ口くさるとも<sup>34)</sup>

寒川の短歌は、浅井一雄、伊丹松男、西岡義伸、永井克己の詩や綴りが反戦平和のものであったと紹介したあとに置かれており、こうした指導作品を生んだ寒川の思想も反戦平和のものであったということを示す役割を果たしている。

筆者は『「山芋」の真実』において、ここで引用した寒川の回想記の部分のうち「兵隊さん ホイ」から始まる詩と寒川の短歌とを除外した部分を引用したうえで、浅井一雄の「兵隊さん」、伊丹松男の「早く平和に」、西岡義伸の「迷信がふえる」、永井克己の「兵隊さんは今夜はねむれない」の4点それぞれに即して検討を加えたことがある。それらの4点は、さがわみちお編『お父さんを生かしたい』（青銅社、1952年）に収録されており、それぞれの作品はいずれも寒川の前述の回想記と符合する内容のものとなっているためである。そして、それら4点を検討した結果、いずれも戦前の作品であることを裏付けることができただけでなく、戦前に寒川の回想とは異質の作品が公表されているものがあることを明らかにしている<sup>35)</sup>。

ここでは、4点のうち2点について再論しておくこととする。

寒川は伊丹松男の尋常科5年生（1937年度）のときの綴方とする「早く平和に」に言及しているが、同じ尋常科5年生のときの伊丹松男の綴方「早く平和に」が1937（昭和12）年に公表されている。そこでは、「僕たちがしんけん出して働けば、兵士たちは安心してよく戦争がなるから、早く支那をうちとつて平和な国にしよう。うんと元氣を出して働かう<sup>36)</sup>」という記述があり、中国との戦争に勝利することを熱望する内容となっている。

また、西岡義仲の「迷信がふえる」も尋常科5年生（1937年度）のときの作品としているが、戦前に公表されたか否かは不明である。ただ、同じ尋常科5年生のときの西岡義仲の綴方「支那をうて」が1937年に公表されている。そこには次のような部分がある。

「(前略)今、支那をしりおしをしてゐるソビエツトを、僕は大きくなつたらこらしめてやらうと思つてゐる。これ位に日本の兵士がナンギをしてゐるといふのに、鉄砲を二万五千チャウも送り、支那と条約して、自分で、こゝからこれだけの地をかりて、日本を大いに困らせてやらうとしてゐるんだから、日本のフンガイするのはあたりまへだ。僕もカタキをとつてやる。大きくなつたら、キツト、キツト。

支那をうて、支那をうて、うんとうて<sup>37)</sup>」  
これも明らかに戦争肯定の綴方である。

伊丹松男の「早く平和に」も西岡義仲の「支那をうて」も、寒川が百田宗治主宰の雑誌『綴方学校』（椎の木社）に投稿したものである。それらの綴方と、寒川が『お父さんを生かしたい』に収録した綴方や寒川の回想記とはまったく異質なのである。

これらを踏まえて、『「山芋」の真実』において次のように指摘しておいた。

「『お父さんを生かしたい』の四つの作品のうち「兵隊さん」「早く平和に」「迷信がふえる」の三つは、戦前の指導作品とはとうてい

考えられないものであり、寒川が戦後に書き下ろしたものと判断せざるをえないものである。また、「兵隊さんは今夜はねむれない」は、戦前に公表した「兵隊さんを思ふ—ニュース映画を見て」の一部を記憶で復元しようとしたもののようである。しかし、それも戦前に公表されたものとは異なるものであった。

このようにみえてくると、寒川が戦後において、戦前の指導作品と称して示したもののなかには、記憶で復元したものばかりでなく、反戦平和の立場から書き下ろしたものが混在しているということが明らかとなるのである<sup>38)</sup>」

つまり、回想記において寒川の短歌の前に置かれている指導作品と称されているものは、戦前のものとみなすことはできないものである。

寒川の回想記の伊丹松男のところに「早く支那をうちとつて平和な国にしよう」を置き換えたり、西岡義仲のところに「支那をうて、支那をうて、うんとうて」を置き換えたりしていけば、そのまゝとめとして「いさぎよく人を殺せと教うるを『教育』とせじ口くさるとも」という短歌はおさまりようなものとなる。

したがって、戦前の寒川の思想を示すかのように配されている寒川の短歌は、戦前の作とみなすことはできない。

#### (ウ) 中野の評伝の問題点

中野が評伝で取り上げた「どれほど荷物が重かろうと」は、『山芋』にすらないものであった。その文言を含む「馬」なるものを「創作」して御墨付を与えたことは明白な誤りである。

また、寒川の回想記にある短歌「いさぎよく人を殺せと教うるを『教育』とせじ口くさるとも」を戦前の寒川の思想を示すものとして用いているが、その短歌は寒川の戦前の指導作品とは整合性がないものであり、戦前の寒川の思想を示すものとして扱うことはできないものである。回想記や証言を史料として用いる上では、批判的な検証が求められることはいうまでもない<sup>39)</sup>。

こうしてみると、中野の評伝は、とうてい検証に耐えるものではないのである。

## おわりに

『山芋』顕彰碑が建立されることとなる発端は、筆者の『「山芋」の真実』否定と寒川道夫擁護を目的として発足した「検討会」にあった。その「検討会」は4回の集会を開催したのち、集会を中断している。筆者は『「山芋」の真実』において「『山芋』は大関松三郎の詩ではなく戦後に寒川が書き下ろした少年詩である<sup>40)</sup>」という見解を明らかにしているが、それに対する反証はまったく示されなかったということとなる。

それにもかかわらず、「検討会」は、2004年に『山芋』顕彰碑の建立を強行した。その碑文においても「検討会」としての成果を示すことはせず、20年近くも前の1985年に発表された中野光の評伝に依拠して起草したものであった。その中野の評伝も、今日の研究状況に照らせば検証に耐えるものではない。

しかし、建立された『山芋』顕彰碑は、寒川道夫や大関松三郎への関心を新たに喚起し始めている<sup>41)</sup>。今後、『山芋』顕彰碑が、寒川が犯した歴史の偽造を拡大再生産する役割を果たすことが危惧される。

## 注

- 1) 記念の集い実行委員会『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立の集い』(2004年9月23日)による。同書はワープロ打ちの原稿をコピーして袋綴じにした簡易な冊子であり、ページは付されていない。
- 2) 「ごあいさつ」『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立記念の集い』(前出)による。
- 3) たとえば、中内敏夫は戦前生活綴方史研究の進展について論及するなかで「九〇年代になると、史料のでそろってきたこともあってその実証的研究がさらにすすみ、一読だけでは暴露ものと誤解されるものができるようになった。たとえば木下浩『「山芋」考—その虚構と真実』創童舎、一九九三年、太郎良信『「山芋」の真実』<sup>(マツ)</sup>日本教育史料出版会、一九九六年」

と述べて、『山芋』研究を例に挙げて研究の進展を評している。中内敏夫『中内敏夫著作集V 綴方教師の誕生』藤原書店、2000年、357ページ参照。

- 4) 新潟日報社編『20世紀にいがた100シーン 下巻』新潟日報事業社、2000年、218ページ。
- 5) 新潟日報社編『幕下りるとき』新潟日報事業社、2005年、55ページ。
- 6) 「経過報告」『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立の集い』(前出)による。下線は引用者が付したもの。以下同様。
- 7) 佐藤守正「『「山芋」の真実』検討会」発足す」にいがた県民教育研究所『研究所通信』第67号、1997年3月、4～5ページより再引用。
- 8) 佐藤守正「『「山芋」の真実』検討会」発足す」前出、5ページ。
- 9) 佐藤守正「新潟で、『「山芋」の真実』検討会、発足す」『作文と教育』1997年4月号、71ページ。
- 10) 同上。
- 11) A4判一枚のワープロ打ちの文書。〔 〕内は引用者によるもの。以下同様。
- 12) 「検討会」についての筆者の問い合わせに対する佐藤守正の2000年1月5日付書簡による。なお、第3回集会、第4回集会の内容は不明である。
- 13) 木村隆利(にいがた県民教育研究所理事長)が、論文「新潟県作文の会の再興を願って—子ども中心の教育を一步でも進めたい」(『作文と教育』1999年11月号)を発表したことがある。「検討会」とは無関係の形で発表されたものであるが、木村論文に記されている聞き取り調査活動が「検討会」第1回集会の後に実施されて第2回集会において報告されていること、紙数の大半が寒川道夫への言及に充てられていること等から判断して、実際には「検討会」の活動を反映したものである。筆者は、その木村論文には先行研究の盗用や史料の改竄などがあること等に焦点をあてた批判論文「寒川道夫研究のあり方をめぐって(上・下)—木村隆利論文の批判的検討」(『作文と教育』2000年6月号～7月号)を書いている。
- 14) 「経過報告」『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立記念の集い』(前出)による。
- 15) 林弘太郎「林直助と恙虫病」『現代医学』54巻1号、愛知県医師会、2006年7月、155～156ページ。
- 16) 同上論文、163ページ。
- 17) 太郎良信『「山芋」の真実』教育史料出版会、1996年、325～326ページ参照。
- 18) 「経過報告」『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立記念の集い』(前出)による。

- 19) 同上.
- 20) 「碑文について」『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立記念の集い』(前出)による.
- 21) 中野光「人間教師 寒川道夫」『総合教育技術』小学館, 1985年12月号別冊付録『管理職講座9』所収.
- 22) 中野光「人間教師 寒川道夫」前出, 54ページ.
- 23) 「碑文について」『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立記念の集い』(前出)による.
- 24) 「石碑裏面の碑文」『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立記念の集い』(前出)による.
- 25) 太郎良信『「山芋」の真実』前出, 22～23ページ参照.
- 26) 引用は「新潟新聞」1932(昭和7)年8月31日付号外の見出しによる. 筆者は『「山芋」の真実』(前出)において, 教育疑獄事件後の大規模な人事異動によるものという見方を示している. 同書209～210ページ参照.
- 27) 太郎良信『「寒川正夫」の葉書』『作文と教育』2002年5月号, 71ページ参照.
- 28) 寒川道夫『人間教師として生きる』新評論, 1978年, 22ページおよび33～45ページ参照.
- 29) 中野の評伝は, 須田清編『恙虫忌文集』(1986年)および須田清編『私のなかの寒川道夫 つつが虫忌会報13回忌特集号』(1989年)に再録されている. いずれも初出は記されていない.
- 30) 中野光は『〈寒川道夫と松三郎〉石碑建立記念の集い』(前出)に「教育者・寒川道夫先生のおもかけ」を寄稿している. その寄稿文において, 戦前の寒川や『山芋』についての言及は皆無であり, この時点での戦前の寒川や『山芋』に対する中野の評価は不明である.
- 31) 中野光「人間教師 寒川道夫」前出, 54ページ.
- 32) さがわ・みちお編, 大関松三郎詩集『山芋』百合出版, 1951年, 57ページ.
- 33) 中野光「人間教師 寒川道夫」前出, 54ページ.
- 34) 寒川道夫『人間教師として生きる』新評論, 259ページ. 初出は, 寒川道夫「治安維持法断罪」大槻健・寒川道夫・井野川潔編『いばらの道をふみこえて—治安維持法と教育』民衆社, 1976年.
- 35) 太郎良信『「山芋」の真実』前出, 158～175ページ参照.
- 36) 『綴方学校』1937年12月号, 8ページ.
- 37) 同上誌同号, 7ページ.
- 38) 太郎良信『「山芋」の真実』前出, 175ページ.
- 39) 太郎良信「証言や教育実践の批判的検討をめぐって」『日本教育史研究』第16号, 1997年, 125～130ページ, 参照.
- 40) 太郎良信『「山芋」の真実』前出, 11ページ.
- 41) 「毎日新聞」の投書欄「みんなの広場」には『山芋』顕彰碑関連の投書がみられる. まず, 「新潟県長岡市の一角に昨年寒川道夫とその教え子の大関松三郎の石碑が建立されたようだ. (中略) 大関は第二次世界大戦で19歳で戦死した. もし戦死しなかったら, すぐれた詩人か小説家になっていたのではないかと思う」(2005年6月29日付. 名古屋市の70歳の男性「今こそ9条の大切さを語り継ごう」という投書がある. 『山芋』が大関松三郎の作という前提での話である. その投書を受けて「私も寒川先生の教え子の一人であり, 石碑建立の除幕式に昨年9月行ってきました. (中略) 先生の和歌の通り, 戦争は二度とないことを祈ります」(2005年8月22日付. 長岡市の81歳の女性「一瞬びっくりそして感謝」という投書がある. 和歌とは, 『山芋』顕彰碑裏面の碑文中の寒川の短歌である.